

# なもみはげたか

——折口信夫、柳田国男とナマハゲに関するノート——

八 木 康 幸

はじめに

大正二四年（一九二五年）一月四日、『東京朝日新聞』「記者課題」欄の記事の一部である。

それから夜九時過ぎ頃にもなれば「ナモミ剥ぎ」といふものが舞ひ込んで来ます、之は大抵村の若い衆のする芸当で二人か三人で組を作り二組か三組が出て来る之は又思ひくゝの仮装を凝らしその上にスッポリ覆面して其誰人かを判らぬ様にします、手には鳴り物大抵は鈴を鳴らし乍ら家を廻り歩きます。

誰だか分らぬ処に興味が深いのですから声も入念の声色を使ひつゝ、称ふる文句は左の通りです

ナモミコ剥げたか剥げたかよ

包丁コ磨げたか磨げたかよ、

小豆コ煮えたか煮えたかよ。

この三つの文句を代るく繰返し、何回も称へます、そして又餅切れ一個づゝを握つて帰つて行きます覆面した此の怪物ナモミ剥ぎの舞込むのを幼い子供は畏怖の心で迎へます余り子供が駄駄をこねたりすると「ナモミ剥ぎ」が来るぞと威したりすることある位物です。因にナモミとは私の村では焚き火に当る為手や脛につく火形のことを言ふので此怪物が此の火形を剥ぎ取りに来るといふ物凄しい訳なのです。（嘯天山人「覆面怪物 鈴を振つて押し寄せる一団」『東京朝日新聞』一九二五年一月四日）



とその類例については、明治期から少なからぬ報告が蓄積されている。柳田国男「妖怪古意―言語と民俗との関係―」（一九三四年）は、これら数々の妖怪を解説しており、同じ柳田編『歳時習俗語彙』（一九三九年）には、全国に亘る類似習俗がさらに詳しく掲げられている。

『東京朝日新聞』の記事よりもかなり後になるが、一九三三年二月二日（旧暦一月二六日）の『秋田魁新報』の記事「赤青黒の面被り蓑を着た夫婦鬼 男鹿地方のナマハゲ」は、土崎港町に伝えられた同様の唱え言葉「庖丁コ、トゲタカ〜ヨ、小豆コ、煮えたか〜ヨ」を示すとともに、「余ンまり火形をつけると、向こふに見える男鹿から正月十五日の夜、ナモミハゲという鬼が来てギラ〜光る庖丁で火形を剥きとり煮えた小豆を塗つて行くぞ」と両親や祖父母に戒められたものであることを伝えている。「ナモミ」ばかりでなく、「磨げた庖丁」や「煮えた小豆」の意味も理解されるところである。

小論の目的は至って単純である。「翁の発生」（一九二八年）以来、「まればと」を論じる折口信夫が、繰り返し引用したのが冒頭の記事に他ならないことを示すとともに、一九三〇年の東北旅行で折口が示した「なもみはげたか」の妖怪「への深い思い入れや、柳田国男『雪国の春』との間に生じたプライオリティに関わる問題などについて、いくつかのテキストを参照しながら考察を巡らせてみたい。筆者の関心は、近代における民俗学的知識あるいは民俗学情報の普及過程にあり、ナマハゲはその目的に好適な事例になると考えている。そして、ナマハゲの知識や情報の普及を考える際には、柳田国男と折口信夫という二人の民俗学者の役割がきわめて重要であり、とりわけ折口信夫と「ナモミ」に関する疑問については、これを見過ごすことができないのである。

## 一 一九三〇年東北旅行

折口信夫は一九三〇年八月二十九日から九月一日頃まで、初の東北旅行に出かけた。自撰年譜には「従来、仙台以北へ行かぬ旅癖を更めてはとの、金太郎の意見による」とあり、同居していた弟子、鈴木金太郎の勧めがあったことを記している（全集<sup>36</sup>二二五）。この旅のおよその行程は、旅先からの八通の書簡と（全集<sup>34</sup>一四一―一四四）、旅の前半をともした遠野の佐々木喜善の日記によって明らかとなる（佐々木二〇〇三―四八三―四八四）。仙台で喜善と落ち合った折口は、花巻、遠野、岩泉へと移動し、八戸で喜善と別れた後に恐山を訪れている。書簡の消印の日付に前後が生じているが、恐山から下りた折口は、今度は男鹿半島に向かったものと思われる。

九月九日、男鹿から留守居役の鈴木金太郎と藤井春洋に宛てた船川局消印の絵はがきには、「こゝは、どこやら、わかりますか、とうとう来ました。今日午前中に島めぐりして、午後ある山にのぼり、ある潟をこえて、能代港へゆくつもり大分道が多すぎる様に思ふ」と書かれている。おそらく折口は、船川港から遊覧船に乗った後、本山、真山、あるいは一ノ目潟、二ノ目潟などを巡ったものであろう。得意のなぞかけを交えた文章から折口の高揚が伝わってくる。そればかりではない。先立つ九月三日、陸中野田町の消印がある金太郎、春洋宛の葉書にも、「なもみはげたかはや」のお面二つ手に入れた。送る。へんてつもないが、ちよつとうれしい」という記載があり、ここでも折口は喜びを隠していない。岩手県下閉伊の安家で入手した「なもみはげたかはや」の二つの面は、すぐに東京に送られた。この折の「東北採集手帖」には、二か所にひらがなで「なもみ」の語が見いだされる（全集<sup>35</sup>二四九、二五二）。面の入手ばかりでなく、折口は現地で「なもみ」の話聞いたものと思われる。旅の目的のひとつが「なもみ」や男鹿半島にあったことを窺わせる一連の行動であった。



口はこの記事でも同様のことを話題にしている。

大正十年の一月頃であつたが東京朝日で農漁村の正月元日から小正月へかけて行はれる珍奇な行事を募つたことがあつた。

自分はそのとき、何処であつたか―小正月の晩にカラダを真黒に塗つた怪物が家々へ闖入して老人や子供の忘れてゐるものを脅かして歩くといふ話を興味ふかく読んだのであるその怪物は肴を入れるやうなビクを腰へ提げ小刀のやうなものを持ち

「ナモミはげたか、はげたかよ

あづき煮えたか煮えたかよ」

と唱ひながら炉にくすぶつてゐる老幼者の脛に付いた火ダコを削りつつしまふのだ、つまりさうした怠け者を励まして歩くのだといふことであつた。  
(折口信夫「男鹿の「ナマハゲ」と矢嶋獅子(一)」『秋田魁新報』一九三二年九月一三日)

折口は、このあと菅江真澄に言及して、「ナマハゲ」「ナマハギ」「カセトリ」「カセギドリ」などの「奇習」が、男鹿半島の漁村ばかりでなく各地にあることを説いている。「近來男鹿のナマハゲを鉄道省あたりで宣伝し日本地理大系などにも引用されて有名になつた、其写真を見ると鬼の面をかぶり蓑をつけている、しかしメンは桐の木でつくつたものや笹や杉皮へ貝殻で目鼻をつけたものなどいろくで自分も各地のものを蒐集してゐるが一定しない」と述べているように、菅江真澄など関係する文献の知識、東北旅行で自ら得た知見に加えて、折口が「鉄道省あたり」の宣伝や「日本地理大系」の記事などを通じて、ナマハゲの知識や情報に接していたことがわかる。

## 二 ナマハゲに関する知識の普及

「春来る鬼」にいう「鉄道省の案内記」で想起されるのは、一九二九年七月に刊行された鉄道省『日本案内記 東北

篇』である。本書には、「なまはげ」以外にも、「かせとり」「もうこ」などの「奇異の仮装をした青年」による行事名が示されている（鉄道省一九二七・二四）。しかし、これらの記述は、東北地方の類似習俗を羅列するものであり、笹や杉皮の面についての記述も見あたらない。いまひとつの、鉄道省の案内書における「生刺」の記述は、一九二四年九月の『十和田 田澤 男鹿半島案内』によるものが先んじている。その内容は、『真澄遊覧記』を淵源として、明治期では狩野徳蔵『雄鹿名勝誌』（二八八四年）、さらには『東京人類学会雑誌』や『風俗画報』のいくつかの関連記事へと引き継がれてきたものと同じであり、文中には「村々の若者が、笹で作った二本の角のある鬼面を著け」というくだりがある（鉄道省一九二四・一〇六）。発行時期からいえば、折口が参照した可能性は両方にあるといえる。紙を貼って彩色するとの記述は、これらの案内書には見あたらないが<sup>(1)</sup>、『旅と伝説』「春来る鬼」の口絵の写真解説に一部言及があることから、むしろ東北旅行における折口自身の知見に基づくものであると思われる。

また、「男鹿の「ナマハゲ」と矢嶋獅子」に言及のある「日本地理大系」の写真とは、正しくは、新光社が刊行した『日本地理風俗大系 第四卷 関東北部及び奥羽地方』（一九二九年一月）の、口絵と本文に掲載された二葉の写真のことである。一頁を使った口絵の写真は彩色されており、折口の心を強く捉えたであろう、迫力に充ちた写真であった。本文の記事「男鹿のなまはげ」は、秋田鉱山専門学校の大橋良一によって執筆されている（大橋一九二九・四一三）。大橋は地質学者、地理学者であり、当時、秋田県内の地誌には欠かせない執筆者の一人であった。他方、改造社の『日本地理大系』は、『日本地理風俗大系』としてのぎを削った同時期の出版企画である。その「奥羽篇」（一九三〇年一月）には、カマクラはあってもナマハゲの記事は含まれていない。「カマクラ」の項目を担当しているのは柳田である。

昭和初期は、ナマハゲの知識や情報が、研究者ばかりでなく民間に急速に普及した時期であった。鉄道省の刊行物や一般向け地誌書、地元で出版された観光案内書、さらには郷土研究者による報告やエッセー、新聞記事、ラジオに



### 二三 「翁の発生」

一九三〇年東北旅行以前の記述はどうであったか。同年の『民俗学』に連載された折口の「年中行事」では、次のように『東京朝日新聞』記事に言及している。

譬えば、信州下伊那の山奥から、三河の北山地にかけては、歳徳神が来る以外に、何だか訣らない妖怪がやつて来る。其前に、別の棚をも一つ設けるところがある。又五六年前の東京朝日新聞に寄せられた報告によると、奥州では春になると、なみと言ふ化物が、顔に鍋墨を塗つて、

なみ剥げたか。はげたかよ      あづき煮えたか。にえたかよ

と言ひ乍ら、家の中へをどり込んで来ると言ふ。なみは手の火だこの事だと考へられて居るが、あづきは、何のことか訣らない。此に就いては以前に少し書いた事があるが、柳田国男先生の『雪国の春』の中には、真澄遊覧記等の秋田辺の化物の記録をすつかり集められてゐる。此なみも、初春に来る魂が、神になれないで化物になつたのであらう。

(折口信夫「年中行事」)『民俗学』二卷一〇号、一九三〇年一〇月、二一―三頁)

一九二九年一〇月、松本市浅間の本郷小学校における講演会の筆録である。筆記者の小池元男によれば、折口の目を通さないまま活字にしたものであるという(全集⑩「解題」：四五一―四五二)。「五六年前の東京朝日新聞」と当時語られたものであるなら、もとの記事の掲載は一九二三、二四年あたりのことと推量されるが、これもまた記憶に頼る発言であらう。文中では、家の中に躍り込んでくる妖怪は「なもみたくり」ではなく「なもみと言ふ化物」と表現されており、また「あづき煮えたか」の意味を折口は説明できていない。「なもみたくり」の名を現地で認め、「あづ

き」の意味を確認するのは、おそらくは一九三〇年の東北旅行を待たねばならなかった。

さらに溯る一九二八年三月、『民俗芸術』掲載の「翁の発生（承前）」は、折口が同種の記事に言及して活字となった最初の論考となる。該当箇所は次の通りである。

今から四年前の初春でした。正月の東京朝日新聞が幾日か引き続いて、諸国正月行事の投書を発表した事がありました。其中に、

な、も、み、剥、げ、た、か。は、げ、た、か、よ

あ、づ、き、煮、え、た、か。に、え、た、か、よ

こんな文言を唱へて家々に躍り込んで来る、東北の春のまればとに関する報告がまじつてゐました。私は驚きました。先生の論理を馬糞紙のめが、ふ、お、ん、に、か、け、た、様、な、私、の、沖、繩、の、「ま、れ、び、と、神」の仮説にびつたりしてゐるではありませんか。雪に埋れた東北の村々には、まだこんな姿の「春のまればと」が残つてゐるのだ。年神にも福神にも、乃至は鬼にさへなりきらずにゐる。畏と敬と両方面から仰がれてゐる異形身の靈物があつたのだ。こんな事を痛感しました。私はやがて、其な、も、み、の、有、無、を問うて来る妖怪の為事が、古い日本の村々にも行はれてゐた微かな証拠に思ひ到りました。かせ・もの、も、ら、ひ、に、関、する、語、原、と信仰が、其であります。此事は其後、多分二度目の洋行から戻られたばかりの柳田先生に申しあげたはずであります。

「雪国の春」を拝見すると、殆んど春のまればと、及び一人称発想の文字の発生と言ふ二つに焦点を据ゑられてゐる様であります。殊に「真澄遊覧記を読む」の章の如きは、彼「なもみはげたか」の妖怪の百数十年前の状態を復元する事に主力を集めてゐられます。馬糞紙のらつばは、更に大きくして光彩陸離たる姿と、清やかに鋭い声を発する舶来の拡声器を得た訳なのです。

（折口信夫「翁の発生（承前）」『民俗芸術』一卷三号、一九二八年三月、一九（二〇頁）

折口はここで、投書記事に接して、「なもみ剥ぎの怪物」と自説の「まればと神」との符合に気付いた驚きを語るとともに、そこから生まれたアイデアを柳田に伝えたことを回顧している。それは、『雪国の春』（一九二八年二月）の

柳田の議論が、自らの着想の延長上にある、という事実の確認を求め訴えのようにも読める。この後、繰り返し言及することになる事例の初めての引用として、折口の思いの溢れる記述であった。

以上のように、時期を溯りながら五つの文章を見てきたが、折口の紹介した新聞記事はすべて同じものであると思われ、したがってそれは、冒頭で紹介した『東京朝日新聞』の投書記事に一致するものであると判断される。大正期後半における同紙の正月記事には、他に類似の企画や報告が見出せないことも、この推測を裏付ける。「翁の発生」の約一年後、当該論文を収載する折口の『古代研究 第一部 民俗学篇 一』（一九二九年四月）は、「今から四年前（大正十三年）の初春でした」と「大正十三年」を括弧書きで補うことによつて、この記事の時期をひとまず固定した（折口一九二九b・五一八）。しかし、一九三〇年東北旅行以後の折口は、「大正十年頃」「大正八、九年頃」などと、時々の記憶のままに異なる時期を語り、書き記すこととなつたのである。

なお、折口が何度か触れた「顔に鍋すみを塗」るとか「カラダを真黒に塗」るなどの特徴は、投書記事には含まれておらず、「翁の発生」にも言及はない。別の記憶が交錯した結果かと思われるが、記事の挿絵に描かれた黒塗りの「覆面怪物」が、折口の記憶に作用した可能性も考えうる。

#### 四 春のまればと

投書記事の日付は大正一四年（一九二五年）一月四日であり、いうまでもなく『古代研究』の「大正十三年」には一年の誤差がある。一九二四年か二五年かという違いは、「まればと」論の形成にこの記事の与えた影響を量る上で重要である。柳田国男の「海南小記」の旅（一九二〇年二月～二年三月）を追うようにして、折口が沖繩旅行を試みたのは、一九二一年と二三年の夏である。「先生の論理を馬糞紙のめがふおんにかけて様な私の沖繩の「まればと

神」の仮説」というように、「海南小記」の「八重山の神々の話」に触発された折口は、毎年同じ季節に彼方から訪れ来て言葉伝える神を発見し、これを「まれびと」として概念化した。その最初の論考「呪言の展開―日本文学の発生 その二―」（一九二四年六月）の中で<sup>(2)</sup>、海を渡って来訪する沖繩の神に対比すべきものとして、折口が「内地」に見出した類例は、当時すでに廃れていた「節季候」「万歳・ものよし」などの、祝言を唱えて廻る訪れ人であった（折口一九二四・三八―三九）。それは、柳田が「海南小記」（『東京朝日新聞』一九二一年三月―五月連載）における八重山の「二色人」との比較において、「初春に吾々の門に来る春駒鳥追、其他種々の物吉ほぎ人と違ふ点は」（四月三〇日記事）と退けたものを、逆に関連づけて理解しようとする試みでもあった。この時点では、本土の他の民俗に触れるところはない。

「なもみはげたか」の記事との衝撃的な出会いはその半年後であり、初めて折口は、東北の「春のまれびと」に注目し、それが「かせ・ものもらひ」などの既知の民俗慣行に通じることに思い至ったものと思われる。次の説明からは、「なもみ」を手がかりに、「かせとり」のような民俗慣行と、先の「ものよし」のような「春のほかひ人」とが、折口のいわゆる「類化性能」<sup>(3)</sup>によって結びつけられる様子を確認できる。

真澄の昔も今の世も、雪間の村々では「なもみ」を「火だこ」と考へてゐる事は、明らかです。が、火だこを生ずる様な働け者・かひ性なしを懲らしめる為とする信仰は、後の姿らしいのです。

かせとり・かさとりとも此を言ふ様ですが、此称へでは、全国的に春のほかひ人の意味に用ゐてゐます。かせはかせなど、通じて、やがて又瘡・くさなど、も同根の皮膚病の汎称です。此をどりに来るのは、人や田畠の悪疫を駆除する事になるので、す。「なもみはぎ」・「かせとり」の文言は形式化したものでありますが、春のまれびとの行つた神事のなごりなる事だけは明らかになつて居ました。

（折口信夫「翁の発生（承前）」『民俗芸術』一卷三号、一九二八年三月、二〇頁）

「翁の發生（承前）」は、山崎樂堂の研究発表（一九二七年二月二日）<sup>(4)</sup>と柳田国男の『雪国の春』（一九二八年二月一日發行）の出版の話題から筆を起こしており、これらと同じ頃に執筆された可能性が高い。投書記事との間には、三年もの時間の経過があることになる。この空隙を埋めるものが、おそらくは、一九二九年一月の『民族』に掲載された「常世及び「まれびと」」である。自撰年譜によれば、一九二五年一月に「日本文学の發生 第三稿」として執筆が開始され（全集<sup>⑤</sup>二二七）、一九二七年一〇月に草稿が成ったものであるという（折口一九三〇「著作年月一覽」二七）。この論文は、柳田との確執により『民族』への掲載が遅れたとされる<sup>(5)</sup>。編集に関与した岡正雄に原稿が渡された時期は特定し得ないが、それが草稿成立の直後であったとして、しかも柳田の拒絶に会うことなく、すぐに活字化されていたなら、發行時期は『雪国の春』と前後していたかも知れない。「おとづれ人」の変化推移を説き、蓑笠姿、乞食者、門芸人、小正月や元日に家々の門戸を歴訪する妖怪、楽土から人間の村を訪れる沖繩の神、「あんがまあ」のような群行する祖先の靈、などを例にあげて「まれびと」を論じるこの論考は、直接的な言及を欠くものの、『東京朝日新聞』の投書記事を窺わせる記述を含む。

小正月或は元日に、妖怪の出て来るのは、主として奥羽地方である。なもみはげたか・なまはげ・がんばろう・もうこなどと言ふ名で、通有点は蓑を着て、恐ろしい面を被つて、名称に負うた通りの唱へ言、或は唸り声を發して家々に踊りこんで、農村生活に於ける不徳を懲す形をして行くのである。私は地方々々の民間語原説はどうあらうとも、なま・なもみは、玄猪の「海鼠」と語原を一つにしたもので、おとづれ人の名でなくば、其目的として懲らさうとする者の呼称ではないかと思ふ。さうでなくば少くとも、我が古代の村々の、来向ふ春の祝言の必須文言であつただけは言はれよう。此妖怪、実は村の若い衆の仮装なのである。村の若者が人外の者に扮して、年頭の行事として、村の家々を歴訪すると言ふのは、どう言ふ意味であらうか。何にしても、不得要領なほととと同じ系統で、まだ其程に固定して居ないものだと言ふ事は知れる。

（折口信夫「常世及び「まれびと」」『民族』四卷二号、一九二九年一月、一六―一七頁）

自撰年譜の起筆時期に信頼がおけるならば、折口の「まれびと」論は、投書記事をきっかけに大きく展開したといふことになる。もつとも「なまはげ・がんばう・もうこ」などは、一九二六年一月の『民族』の報告に依つたものと思われ<sup>(6)</sup>、投書記事の一年後の情報である。「目のよる処に珠」の一例であろう。

## 五 「雪国の春」

先に見たように、「翁の発生（承前）」において、折口は『雪国の春』に対する自説の優先を主張している。折口が注目するのは、折口なりに表現すれば、柳田が「春のまれびと」「一人称発想の文学の発生」に示した関心であり、「真澄遊覧記を読む」において復元した「なもみはげたか」の妖怪の古い姿である。「春の鬼」に関する愚かな仮説が、先生によつて見かはすばかりに立派に育てあげられてゐた」（折口一九二八・一八）と明記する折口には、有力な確信が相当の思いこみがあったものと思われる。

ナマハゲと同種の小正月の慣行に関する知識は、柳田や折口のような当時の研究者であれば、『東京人類学会雑誌』『風俗画報』などの記事を通じて共有されていたはずである。佐々木喜善は、『遠野物語』受贈の柳田宛礼状（一九一〇年六月一八日付書簡）で「ナモミタクリ」「カセギドリ」に触れており（佐々木二〇〇三・二〇）、大正期には、同じ佐々木による「ヒガタタクリ」「カセギドリ」や、伊能嘉矩による「ヒガタタクリ」「ナマハギ」についての報告が『人類学雑誌』（『東京人類学会雑誌』を改題）に掲載されている（佐々木一九一四、伊能一九一九）。柳田自身も、後年ではあるが、一九二〇年八月の遠野訪問時に、伊能嘉矩との間で「カセギトリ」「火カタタクリ」「ナゴミタクリ」が話題となつたことを記録している（柳田二〇〇〇・二六三）。そこで出た菅江真澄と男鹿半島の話は、伊能による前年の『人類学雑誌』の報告内容に照応する。遠野から気仙沼、釜石を経た柳田は、大槌の宿舎で「ナゴミタクリ」「ガンボウ」

「モウコ」の話を詳しく聞いたという（柳田一九三四：一一―一二）。さらに、旅の最後に立ち寄った秋田図書館で、柳田は『真澄遊覧記』に目を通したらしい（石井二〇〇六a：三六）。遠野での話題を確認した可能性もある。

しかし、大正末年までの柳田は、このようなナマハゲの類例を、広く小正月行事の中心に据えて論じることがなかった。一九二二年一月一六日の『東京朝日新聞』に、柳田の執筆した「小正月の晩」は、月明かりに少年たちが「如何にも神の使などのやうに、不思議な形式を以て訪問する」慣行に着目し、「ほとく」「ことく」「とろべい」とびく、「かせとり」「茶せ子」などの行事を紹介するものであった。この種の小正月行事もまた、『東京人類学会雑誌』『風俗画報』『郷土研究』などを通じて、少なからぬ資料が蓄積されていたものである。柳田は、これらを「或地方に於ては主として稲作の豊熟を祝ひ、他の地方では花嫁の丈夫で、子福者ならんことを予言した」ものであり、昔から行われてきた厳重な儀式である、と見ているが、それ以上に議論を深めてはいない。「ヒガタタクリ」や「ナマハギ」は、妖怪の類として、子供の行事と並置してみる着想には至らなかったものであろう。

ところが、一九二六年一月の『婦人之友』に発表した「雪国の春」は、沖繩八重山の島々と小正月の仮装の訪問者結びつけて、「歳の神に仕えて居た生活の痕」を論じたものであり、本土各地の小正月行事についても、小児の遊技に近い行事を数えるばかりでなく、男鹿の「なまはぎ」や閉伊の「なごみたくり」を合わせて理解しようとするものであった。八重山の島々の例は、いうまでもなく「海南小記」の穂利祭の二日目の暮方に出る赤又黒又の二神を意味する。それは折口信夫による「まれびと」の出発点でもあった。

雪国の多くの町に、正月十五日之（綱曳きの神事）八木注を行ふ他に、朝鮮の半島にも同じ日に行はれ、南は沖繩八重山の島々にも、日はちがふが殆ど同じ式が行はれた。同じく穀祭の前には二人の若者が神に扮して、此等の孤島の村々にも訪れた。本土の各地では其神事がや、弛んで、小児の遊技のやうにならうとして居るが、これも正月十五日の前の宵で、或は夕

ビ〜トビ〜と謂ひ、又はホト〜コト〜など、戸を叩く音を以て呼ばれて居るのみで、祝言を家々にもたらす行事は一である。宮城福島に於ては茶せん子とも笠鳥とも謂つて居る。それが今一つ北に行くと、却つて古風を存して南の果に近く、敬虔なる若者が仮面を被り、藁の衣装で身を包んで、神の語を伝えるるので、殊に怠惰の者を憎み罰せんとする故に、之を「なまはぎ」とも「なごみたくり」とも、又「ひかたたくり」とも称するのである。閉伊や男鹿島の蝦夷の住んだ国にも、入代つて我々の神を敬する同胞が、早い昔から邑里を構え、満天の風雪を物ともせず、曆が春を告ぐる毎に古式を繰返して、歳の神に仕えて居た生活の痕である。

(柳田国男「雪国の春」『婦人之友』二〇巻一号、一九二六年一月、六〇頁)

「祝言を家々にもたらし」「神の語を伝えるに來る」小正月の仮装者に、訪れる神を見るとすれば、それは折口の「まれびと」の仮説に重なる。柳田の記述は慎重であり、当然ながら「まれびと」の語を使用することはなく、來訪者を「神」そのものと見ることもない。「なまはぎ」「なごみたくり」「ひかたたくり」などの呼称も、佐々木喜善や伊能嘉矩の報告と自身の採集に依拠したもので、折口が一年前に見出した投書記事の影響を窺わせるところはない。それにしても、「小正月の晩」と「雪国の春」の間には、大きな飛躍が見られる。「海南小記」と「雪国の春」の間もまたしかりである。「海南小記」で一旦切り離された「永く神の御幸の昔の悦ばしきを味はふことが出来た」八重山の島々と、「無邪気な童子等の口を仮りてせめては春の初めには耳に快い祝福の言を聴かうとしたが、根本に於て既に纏るべきものを忘れた為に、是も亦古臭い戯れごとと為つてしまつ」た本土との懸隔に、新たな接近がもたらされている。これら点で、二年後、『雪国の春』の巻頭に配されるこの論考の成立に、折口のなながしかの媒介があつたことを、少なくとも想像することは許されるであらう。

## 六 「をがさべり」と『雪国の春』

柳田は「雪国の春」の翌年、一九二七年五月に男鹿半島一周の旅をしている。閉伊や遠野で「なごみたくり」や「ひかたたくり」の理解を深め、「雪国の春」で「なまはぎ」に言及した柳田にとって、男鹿半島はもう一つの訪ねるべき土地であった。前年、前々年には、小野武夫らによる男鹿地方の「ナマハゲ」の報告も相次いで（小野一九二五、三浦一九二六）、機は熟していたといえる。男鹿半島一周の案内役は、奈良環之助がつとめた（奈良一九六三）。一九二三年、奈良は小野武夫にナマハゲの話をしており（小野一九二五・八二）、柳田の訪問時にも、旧師に自ら有するナマハゲの知識を伝えたはずである。

男鹿の風景を論じた紀行文「をがさべり」は、柳田の帰京後、『東京朝日新聞』秋田版に連載された。長く所在が確認されぬままであったが（赤坂一九九七・八四六）、石井正己の呼びかけに応答があり、秋田県議会図書室所蔵の新聞切抜き帳『古今帖』の四〇巻に、（一）から（一五）までの連載のすべてが貼付、保存されていることがわかった（石井二〇〇六b・五二～五六）。初回（一）の切抜きには、手書きで「昭和二、七、五、東京朝日新聞」と記されているが、印刷部分の日付は残されていない<sup>7)</sup>。『雪国の春』が編まれる際に（二〇）が外され、残り一四回分に見出しが付された。「ナマハギ」を主題としたのは（六）である。『雪国の春』では、「おがさべり（男鹿風景談）」と題した章の中に、「正月様の訪問」の見出しを付して収録されている（柳田一九二八・二七〇～二七四）。

この回の記事は、「ナマハギ」の話題に始まり、奥州の太平洋側ではそれが「ナゴミ」「ヒカタタクリ」と同じであること、さらに南へ移動しながら「サセドリ」「チャセンゴ」「タビタビ」「ホトホト」「コトコト」「カユヅリ」「トビ」などと、関東、中国、瀬戸内から九州までの類例があることを示し、さらには「八重山群島の村々」にまで比

較を及ぼしている。「雪国の春」と逆の順序で南から北へと進み、「一年の始めに遠い国から、村を訪づれる神に擬したものを」を解説するもので、その主旨は「雪国の春」とほぼ同じである。

連載記事（六）と、半年後に出た単行本『雪国の春』の「正月様の訪問」をいち早く比較した石井正己は、分量が五割ほど増えて変更が著しいこと、微妙な書き換えでより正確になり臨場感が生まれたことを指摘している。連載の「ナマハギと同じくその日はどこの国でも必ず小正月の晩に限つてゐる」という箇所は、『雪国の春』では「閉伊のナゴミも男鹿のナマハギもよく似て居て、其時期はどこの国でも、必ず正月十四日の深夜に限られて居る。即ち是が本来我々の年の神の姿であつたのだ」と書き換えられている。石井は「即ち」以下の一文が書き足されていることについて、それが「民俗事象の深層に潜む起源を明らかに」する周到な変換であると見ている（石井二〇〇六b：五二～五四）。

「本来我々の年の神の姿」とした部分の変換は、石井の指摘通り重要である。同様に「神」に関わつて注目すべき変更箇所が、他にも見出される。「太平洋に面した奥州の一部では、ナマハギと同じものを、ナゴミまたはヒカタタクリと呼び」という件では、「ナマハギと同じもの」が「この小正月の晩に来る蓑笠の神様」と言い換えられている。さらに最終の段落にも、柳田の推敲の手が及んでいる。

ところが海を越えて遙か南の八重山群島の村々には、また男鹿と同じく、至つて謹厳なる信仰をもつて、これを迎へて一年の祝いごとを、聴かうとする風習があるとは、前に海南小記の中に少しばかり述べて置いた。これは一年の始めに遠い国から、村を訪れる神に擬したもので、男鹿ではその神を神山の峰から、降りてくるものと信じて居たのである。

（をがさべり（六）『東京朝日新聞』秋田版一九二七年七月か？）

ところが海を越えて遙か南の、八重山群島の村々に於ては、又北の果の男鹿半島と同じやうに、至つて謹厳なる信仰を以て、

之を迎へて一年の祝ひ言を聴かうとする習がある。此ことは曾て海南小記の中に些しばかり述べて置いたが、其は変化の色々の段階が地方的に異なるといふのみで、本来一つの根源に出づることは、比較をした人ならば疑ふことが出来ぬ。即ち一年の境に、遠い国から村を訪れて遙々と神の来ることを、確信せしめんが為の計画ある幻しであつた。さうして男鹿人の如きは当然に彼等のナマハギを、霊山の嶺より降り来るものと認めて居たが故に、この深い山水因縁が結ばれたのである。

(柳田国男『雪国の春』岡書院、一九二八年二月、二七四頁)

「村を訪れる神に擬したもの」と「遙々と神の来ることを、確信せしめんが為の計画ある幻し」、あるいは「降りてくるものと信じていた」と「降り来るものと認めて居た」などの違いは、ともにまことに微妙ではあるが、訪れる神を信じる人々の心意に多少とも寄り添つた表現への書き換えであるように思われる。石井のいう「臨場感」が増した、といつてもよい。話法の変換というに近い。ちやうど「海南小記」の「二色人」における「新宮良の住民は、祭りの日に人が神と為ることをよく知つて、而も人が神に扮することは知らぬやうである」という対比にも似て、その前者の表現に比重が移っているかに見える。新たに付された「正月様の訪問」という見出しにも、「年の神の姿」や「蓑笠の神様」と同様に、これを迎える人々から見れば「神」である、という行為者の主観に基づく直截的な命名が採用されている。事実を重視する柳田にしては、やや踏み込んだ表現へと変換されているのである。

一九二六年の「雪国の春」で「今一つ北に行くと、却つて古風を存して南の果に近く」(柳田一九二六：六〇)と、南北の一致に言及した柳田は、連載から単行本への移行に際して、「此ことは曾て海南小記の中に」以下の一文を挿入することで、さらなる確信を深めている。同じ昭和二年には、「蝸牛考」(一九二七年五月〜七月)を発表して方言の周囲を説き、「南海の島々と奥羽の端とを比較して見る事が至つて大切であり」と注意を喚起している(柳田一九二七：二六六)。いわば強い自信に裏付けられて、柳田は沖繩から東北に至る広域、あるいは日本の全体を視野に入れ、遠い国から遙々と神の訪ねて来ることを論じ得た、と理解すべきなのである。

## 七 折口と柳田と

『雪国の春』（一九二六年一月）から、男鹿半島一周旅行と「をがさべり」の新聞連載を経て、『雪国の春』（一九二八年二月）の刊行までは、二年余りに過ぎない。しかも『雪国の春』には、両論考に加えて、急ぎ書き下ろした「真澄遊覧記を読む」<sup>(8)</sup>が収録されており、そこでは、菅江真澄の見聞した近世の東北の村々の正月が、カセギドリやパカパカなどの行事を含めて紹介されている。『雪国の春』において、ナマハギやその類例をめぐる解釈は、柳田の広い目配りのもとで、短期間のうちにも美しい表現を通じて見事に示された、といつてよいであろう。

これに対して、『雪国の春』刊行の時点では、「なもみたくり」を扱う折口信夫のいかなる論考も、まだ活字にはなっていない。繰り返すが、「常世及び「まればと」」の起筆や脱稿時期についての、折口の自撰年譜等の記述が誤りではなく、同稿の『民族』への掲載が、岡正雄の回顧する通り、柳田に起因する停滞を余儀なくされたものであるならば、「翁の発生（承前）」で折口が示す、自説の優先に対する過剰とも思える拘泥や、山崎楽堂の発表の話題にこと寄せた、暗に柳田に向けられたと思える、学者の道義を説く厳しい姿勢も、それとして首肯できるように思われる。

岡茂雄『本屋風情』によれば、柳田は『雪国の春』の出版を一九二七年一月下旬に着手し、翌年一月中の刊行を目指したという（岡一九七四）<sup>(9)</sup>。石井正己は、柳田の急いた原因を、江戸時代から出版は正月にする習慣があること、そして一九二八年九月の真澄百年祭の準備に向けて、『雪国の春』を題名に相応しい時期に刊行すること、などへの柳田のこだわりに求めている（石井二〇〇六a：三七）。『雪国の春』と「常世及び「まればと」」に至る微妙な過程の理解を目指して推測を重ねた小論の立場からすれば、柳田が刊行を逸る心の内に、「常世及び「まればと」」の原稿があった、との憶測を加える誘惑を禁じ得ないところである。かつて永池健二は、「柳田からみれば、採集資料と

文献資料の区別もなく、論証の手続きにも無頓着で、あたかも自己の内的な思考の過程をそのまま叙述したような折口の文章を認めるわけにはいかなかったのである」と掲載拒否の論理を解説したが（永池一九八八・七六三）、さらに岡正雄のいう「プライオリティのひっかかり」が（岡一九七三・二三五）、「まれびと」と「なもみたくり」を巻き込んで生じていたところに、ことの複雑さがあつたのであろう。

この問題をめぐっては、西村亨『折口信夫とその古代学』が、かなりの頁を割いて考察を加えている。西村によれば、柳田は「採集された事実を重く見て、解釈が先走りすることを抑えようとする」し、折口は「連想のはたらきが飛躍して常人の思い及びがたい理論を構築する」。西村もまた、「民俗学を人文科学の一分野として、採集した民俗の比較から自然な結論へ導いてゆくという学問の方法を確立しようとしている柳田にとって、二段階も三段階も飛び越して結論へと飛躍してゆく折口の思考はきわめて危険なものと映つたに違いない」と述べて、永池と同様に「常世及び「まれびと」の掲載拒絶の背景を見出そうとしている（西村一九九九・三二四～三三〇）。残念ながら、西村の議論の前提となる事実認識には、少なからぬ思い込みや誤解が含まれていると思われるが<sup>10</sup>、他方、次の記述を見れば、かくあれかしとの願いを差し引いたとしても、折口の心の動きを推量する弟子のまなざしには妥当なものがあるように感じられる。

しかし、折口の心中にはことばに余る思いがあつたのではないだろうか。「翁の発生」の読者には柳田・折口の師弟関係、折口の所説に通じている人も少なくなかつたと思われるが、それでも柳田の「雪国の春」以前に折口が来訪神について説を立てていることをしっかりと把握していた人の数は限られていることだろう。折口としては、自己のまれびと論の証拠を残しておきたかつたに違いない。まれびと論にはそれだけの愛着を持つていたし、柳田という大きな存在の前に自己のまれびと論が霧消してしまう恐れさえ感じていたかも知れない。もとより柳田と発表の前後を争うなどという気持ちはなかつただろうが、世間の目に師弟の学説の交流が認められれば、どれほどか満足なことだったろう。

(西村亨「折口信夫とその古代学」中央公論新社、一九九九年三月、三三三頁)

## おわりに

「常世及び「まれびと」」は、柳田が編集から手を引いた後の『民族』四卷二号(一九二九年一月)に掲載され、時をおかずに「国文学の発生 第三稿」と表題を変えて、『古代研究 第二部 国文学篇』(一九二九年四月)の巻頭を飾った。翌一九三〇年の東北旅行では、折口は、下閉伊郡安家でなもみの面を入手し、男鹿半島への初の訪問を果たした。船川局消印の絵はがきに記した、「こ、は、どこやら、わかりますか、とうくく来ました」の文言には、折口の格別に深い思いがこもっていたのであろう。柳田に三年遅れて男鹿半島の地を踏んだ折口の感慨は、この旅の始めに訪ねた遠野の「六角牛の翠微を望んで」、二〇年前の柳田に抱いた羨望と同じものであったかどうか、問うてみたい気がする。その後も、折口は「なもみたくり」を語ったが、とくに秋田の人々に向けた二度の新聞記事は、ナマハゲを単なる奇習としてではなく、秋田を代表する民俗行事へと再想像させる役割を果たした。

他方、柳田の『雪国の春』は、「ナマハギ」の議論に留まらず、優れた東北文化論でもあり、また「全国的综合」を目指して民俗学の研究が進展して行く出発点ともなるべき書であった。東北と沖繩の遠方の一致という考え方は、その後、「東北と郷土研究」や『民間伝承論』において磨きをかけられ、日本民俗学の確立を支える方法となった。柳田のナマハゲへの関心は、「妖怪古意―言語と民俗との関係―」や『歳時習俗語彙』に引き継がれてゆくが、そこでは、ナマハゲとその類例には「小正月の訪問者」の用語が充てられ、神を思わせる表現は姿を消す。揺らぎは解消され、眼前の事実を連ねることに重点は移るのである。ナマハゲを妖怪として論じる前者の論考で、柳田は「ナモミコ剥げたか剥げたかよ 庖丁コ磨げたか磨げたかよ あづきコ煮えたか煮えたかよ」の文句を紹介している(柳田一

九三四・九。出典の明示はないが、まさしく一九二五年正月の投書記事そのままの引用であった<sup>(10)</sup>。それは折口が一度たりとも、一字も過たずに伝えることをしなかったものであった。

もとより小論は、柳田国男研究でも折口信夫論でもない。近代においてナマハゲが民俗文化として「発見」され、やがてその知識や情報が一般に普及していく過程において、この国の民俗学を導いた二人の研究者がどのような役割を果たしたのか、大正末期の新聞記事を糸口にして一部検証を試みたに過ぎない。

## 註

- (1) 明治期の報告には、「竹筴ノ大面ニ金銀箔紙ヲ装シ五色ヲ彩リテ」（佐藤一八九五・二四九）、「彩色したる杉皮或は紙製の鬼面を被ひ」（升谷一八九七・一七）などと彩色に言及したものが存在する。
- (2) 「まれびと」の用語は「呪言の展開―日本文学の発生その二―」において定着したとされる（池田一九七八・四四四、西村一九九九・二八八～二九三）。
- (3) 『古代研究 第一部 民俗学篇 二』「追ひ書き」において、比較能力のうち「類似点を直感する傾向」として折口自らが定義している（折口一九三〇「追ひ書き」・二二）。中村（一九九五・一四三～一四七）を参照のこと。
- (4) 日付は、『民俗芸術』一卷一号の「民俗芸術の会の記」に掲載された第四回談話会の記録による。
- (5) 岡正雄のインタビュー記事に基づく（岡一九七三・一三五～一三七）。この記事を引用して「常世及び「まれびと」を論じた研究は少なくない。ここでは、池田（一九七八）、永池（一九八八）、西村（一九九九）を挙げておきたい。
- (6) 『民族』一卷二号的「資料・報告・交詢」欄に、「ガンボー」「モトコ」（山本一九二六）や「ナマハゲ」（三浦一九二六）の報告が掲載されている。
- (7) 秋田市の西宮正男が生涯をかけて編集した『古今帖』全二七八巻（秋田県議会図書館蔵）については、『秋田魁新報』の記事「まさに時代の証言集」（一九八四年二月二日）を参照のこと。
- (8) 章末に「昭和三年一月一六日記」と付されており、脱稿を急いだことがわかる。
- (9) 記憶頼みの回顧と思われ、当時の資料を確認した上での記述かは疑問である。例えば、『雪国の春』初版の最大のミスは、

なもみはげたか

二七五頁と二七六頁の間に一頁分が欠落していたこと、すなわち、本来あるべき二七六頁の落丁であったと思われるが、これには触れるところがない。

- (10) 折口の「まれびと」論に対して、「なもみ剥げたか」の投書記事が果たした役割の重要性に、早くに注目したのは西村亨（一九九六）であった。一九九九年の『折口信夫とその古代研究』は、その関心をさらに発展させたものである。折口のテキストの読解が深く、傾聴に値する考察が少なくない。その一方で、次のような欠陥を抱えている。

- ① 『古代研究 第一部 民俗学篇一』の表記に従ったために、東京朝日新聞の投書記事の日付を大正一三年（一九二四年）一月として、一年の誤差を生じさせている。投書記事を確認した形跡もない。
- ② 新聞記事に触発されて、折口が一九二四年夏に男鹿に赴いた、とする穂積生萩の説を根拠なく受け入れている。そのような事実は確認し得ず、穂積説（たとえば、穂積一九九六）は、おそらくは詩人の夢想に近い。『秋田魁新報』の「秋田に残る奇習（春来る鬼）」で折口が回顧するのは、一九三〇年の旅である。
- ③ 「雪国の春」の発表時期を大正一四年（一九一四年）一月として、一年の誤差を生じさせている。『雪国の春』に誤記があり、同書を底本とした『定本柳田国男集二』巻末の「内容細目」も、同じ誤りを踏襲している。
- ④ 折口の指摘を受けるまで、柳田にはナマハゲの知識がなかったとしているが、誤解である。柳田は、関連する地誌の記述や各種雑誌の報告に通じていたほか、一九二〇年東北旅行でも、佐々木喜善や伊能嘉矩との交流を通じて、ナマハゲやナゴミタクリ、ヒカタタクリの知識を確認し、自らも聴き取りを行っている。
- (11) この引用に続く段落で「右のナモミが野草の名の、ヲナモミ・メナモミと関係があるらしいことは、夙く折口君などが是を説いた。関係は有るかも知らぬが少なくとも直接では無く、又今はまだ少しも証拠が無い」として「翁の発生（承前）」の折口の着想を批判しているのは、意趣返しのようにも読める（柳田一九三四・九）。

### 参考文献

- 一、『折口信夫全集』（新版、中央公論社）については、本文中に「全集⑩」「全集⑭」などと表示するにとどめた。
- 二、新聞記事の書誌情報は本文中にのみに掲げた。
- 三、奥付の発行月を付すべきと判断した文献については、それぞれの末尾に括弧書きで示した。

- 赤坂憲雄 一九九七「解題 雪国の春」『柳田国男全集 三』筑摩書房、八三八～八四七頁
- 石井正己 二〇〇六 a 「真澄と柳田国男 (一) — 雪国の春 — から見えてくるもの」『真澄研究』一〇、二三～五〇頁
- 石井正己 二〇〇六 b 「真澄と柳田国男 (二) — 真澄遊覧記」刊行の実験— 『真澄研究』一〇、五一～七七頁
- 池田弥三郎 一九七八「日本民俗文化大系 (2) 折口信夫」講談社、四六七頁
- 伊能嘉矩 一九一九「風俗の溯源より観たる陸中遠野郷地方の新年慣行」『人類学雑誌』三四—、二八～三二頁 (二月)
- 大橋良一 一九二九「両羽地方」『日本地理風俗大系 第4巻 関東北部及び奥羽地方』新光社、三九八～四三三頁 (二月)
- 岡茂雄 一九七四『本屋風情』平凡社、二九七頁
- 岡正雄 一九七三「連載インタビュー 柳田国男との出会い」(聞き手：谷川健一・伊藤幹治・後藤総一郎)『柳田国男研究』創刊号、一二七～一五五頁
- 小野武夫 一九二五「男鹿半島の「ナマハゲ」」『歴史地理』四五—二、八〇～八二頁 (二月)
- 折口信夫 一九二四「呪言の展開—日本文学の発生 その二—」『日光』一一三〇、三五～四七頁 (六月)
- 折口信夫 一九二八「翁の発生 (承前)」『民俗芸術』一一三、一七～三二頁 (三月)
- 折口信夫 一九二九 a 「常世及び「まれば」と」『民族』四—二、一～六二頁 (二月)
- 折口信夫 一九二九 b 「古代研究 第一部 民俗学篇 一」大岡山書店、六四〇頁 (四月)
- 折口信夫 一九三〇「古代研究 第一部 民俗学篇 二」大岡山書店、本文六四一～二六六頁 (六月)
- 折口信夫 一九三一「春来る鬼」『旅と伝説』三五、二～一頁 (一月)
- 佐々木喜善 二〇〇三「佐々木喜善全集 IV 遠野市立博物館、六四五頁
- 佐々木繁 (喜善) 一九一四「陸中遠野郷にての冬期に於ける年中行事の一例」『人類学雑誌』二九—、三四～三八頁 (二月)
- 佐藤初太郎 一九九五「羽後国男鹿半島ノ土俗」『東京人類学会雑誌』一〇八、二四八～二五〇頁
- 鉄道省 一九二四「十和田 田澤 男鹿半島案内」鉄道省、一二〇頁 (九月)
- 鉄道省 一九二九「日本案内記 東北篇」博文館、本文三〇八頁 (七月)
- 永池健二 一九八八「雑誌『民族』とその時代」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房、七三四～七七二頁
- 中村生雄 一九九五「折口信夫の戦後天皇論」法蔵館、二六三頁
- 奈良環之助 一九六三「柳田先生と秋田」『定本柳田国男集 月報』二二、筑摩書房、一七一～一七二頁

- 西村亨 一九九六「まれびと論構築への着手―学風樹立の跡を追って―」『折口信夫全集 月報』一九、中央公論社、五〇八頁
- 西村亨 一九九九「折口信夫とその古代学」中央公論新社、三九九頁
- 穂積生菰 一九九六『折口信夫 虚像と実像』勉誠社、二三五頁
- 升谷積山 一八九七「羽後男鹿島の風俗」『風俗画報』一三二、一七頁
- 三浦隆次 一九二六「秋田県船川のナマハゲ」『民族』一一二、一六八頁（二月）
- 八木康幸 二〇〇九「近代における民俗文化の発見とその知識、情報の普及過程―男鹿のナマハゲを事例として―」『関西学院史学』三六、七九―一八頁
- 柳田国男 一九二六「雪国の春」『婦人之友』二〇―一、五二―六一頁（一月）
- 柳田国男 一九二七「蝸牛考（二）」『人類学雑誌』四二―一五、一六二―一七二頁（五月）
- 柳田国男 一九二八「雪国の春」岡書院、三八〇頁（二月）
- 柳田国男 一九三四「妖怪古意―言語と民俗との関係―」『国語研究』二―四、八―二二頁
- 柳田国男 二〇〇〇「大正九年八月以後東北旅行」『民俗学研究所紀要』二四、二三五―二五七頁
- 柳田国男編 一九三九『歳時習俗語彙』民間伝承の会、本文七〇三頁
- 山本鹿洲 一九二六「釜石地方の正月」『民族』一一二、一六七頁（二月）